

## 本朝画法大伝

### 和漢画祖伝記

画に和漢の別あり、古は 本朝に名手多し、中二も百済河成巨勢金岡藤原信実土佐家、和之祖、和画ノ達人なり、しかるに人皇百一代後小松院ノ御宇、応永年中に異国より如雪乱芳軒と云僧来りて、漢画を描きて名を当時に播ホドこす、爰に狩野祐清正信元信か父、永享年中人也といふ者あり、

如雪を師として漢画を学べり、又其後周文と云春育とも云唐僧来り、相国寺に住し漢画をよく

す、雲谷寺之座主雪舟

備中国赤濱之 満溪齋とも米元山主ともいふ、後花園院寛正年中大明に入、四明天台に人也姓ハ山田也 登り第一座主と成、帰都之後周防国山口雲谷寺に住す、仍て雲谷と云

周文

を師とし漢画を学ぶ、此時正信も同じく周文に教を受たり、雪舟・正信同門たるを以て

兩人之筆勢周文に髣髴ホウホツサモニクリたり、又藤原信実か末裔に土佐将監光信と云者、天性和画に工に

して遠祖信実にも恥ず和画之第一と称せらる時に正信か子光信後古法眼といふ土佐光信か女を娶

りて縁家の好を結び、且光信に和絵の法を受たり、此時諸国乱れて軍戦しばく打続世

間おだやかならず、光信は難を紀州にさけ、或は泉州和州に身をひそめて太平之時を俟

けり、雪舟は筑前に下り蘆屋アシヤに寓居して釜の絵を書いて給食す、後又大明国に渡り張有聲

を師として画の草を習得て 本朝に帰ル、是本朝草画のはしめなり、是より前は皆真画

のミにして草なし、此雪舟を漢画師といふ、又元信は本朝に産れて何ぞ異国の風骨を事

とせんやといふて漢画を物の数ともせず、専 本朝の風格を建とす、是に於て和漢の両

品を別てり、雪舟を漢画師と名付ケ、元信を 本朝の画師と称する心を以て本画師と称

せり、是によりて自然と狩野氏の流儀を総名に本画と呼来れり、曾て明国の鄞城鄭沢キンジャヤウテイタクと

いふ者元信に書を贈りて亶マコトに狩野氏ハ画家の徴証也といへり、又土佐光信は曾て累世和

画の名家なれば漢画に心を寄せず漢物を描エガず草画を描エガず、唯真画のミ益事とせり、仍而

和画師と呼来れり、以上合せて三画師と云雪舟・元信・  
光信三家也土佐ハ天性器用の勝れたる者なり、

元信は修行シ勝れたる者也とぞ

案ずるに狩野元  
信我意をたて

漢画に事とせず 本朝之風格を立といへども、元来雪舟・正信  
兩人ともに周文に漢画を学びしより、元信もおのづから漢画の  
筆勢あり、況や草画を雪舟より伝受、事なれば漢画にあらずして  
なんぞ和の風格のミといはんや、又土佐・光信に和画の法を学ふ

により和漢混雜して其筆勢和にあらず漢にあらず自成一  
家者といふべし、又土佐家にハ多くは和の人倫を描を

宗として草木蒼鳥を事とせず、俛に禽獸を画たるも皆和の禽獸  
也、すべて人倫草木蒼鳥に至るまで精密をつとむ、依而草画

を描事多くハなし、其精密に至  
ては狩野家は流の及所にあらず

浪華画師後素軒識